

「留学生が大学生活で抱える困難について」

基礎教育 小田珠生 Tamaki Oda 基礎教育 大森弦史 Genji Omori

近年、東京工芸大学芸術学部に入学者数は増加の一途にあり、入学者数に対する留学生数の割合は、この5年間で約3倍になった（2015年度現在）。まずは、留学生が置かれている現状を知り、各々が直面している困難を適確に把握することによって、彼らに対するより良い支援の在り方を模索する必要があると考えられる。

本研究は、東京工芸大学芸術学部所属する留学生に対するインタビューに基づき、個人ごとに意識構造を分析する PAC 分析（内藤 2004）を行うことにより、彼らが大学生活を送る上でどのような困難を抱えているかを明らかにしたものである。特に「学生が所属する学科の留学生の割合が高いかどうか」、「学生が留学生の中で多数を占める中国語話者かどうか」という点に着目し、4名の留学生のインタビューデータを取り上げた。分析の結果、大きく分けて「言葉の壁が大学の授業への十全な参加を妨げていること」と、「ネットワークの構築が可能な環境が整っていないこと」が彼らの困難点として浮かび上がった。

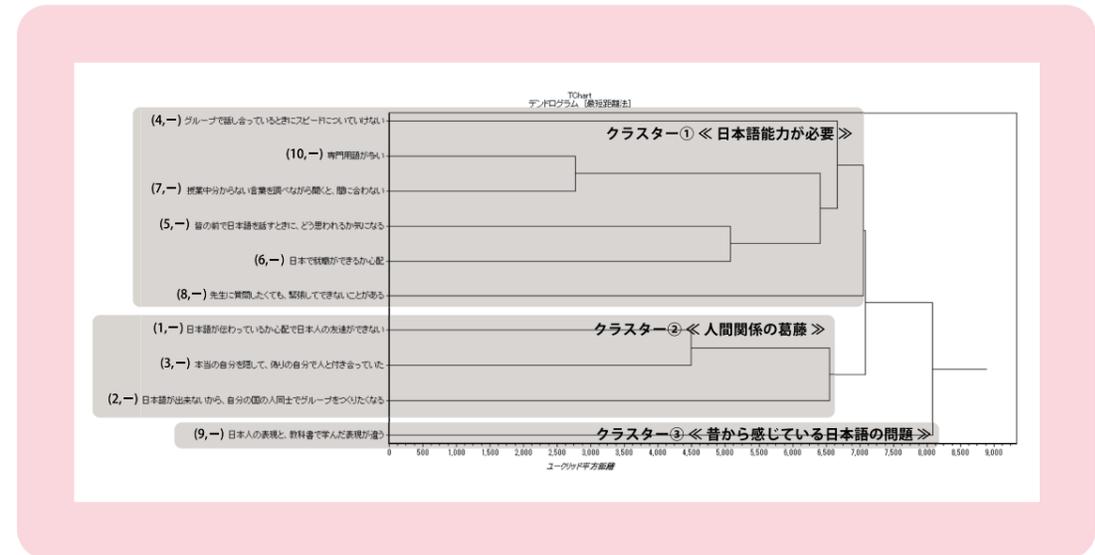
これらの結果から、言語教育のあり方と環境整備の両方を視野に入れて彼らの学生生活を支援する方法を模索していく必要があることが明らかにされた。特に前者に関しては、「日本語」の授業を彼らの専門分野や学科の授業とのつながりのあるものとして捉えた上で授業内容を検討する必要があることが示唆されたと言えよう。



小田珠生・言語生態学を理論的支柱とする持続可能性日本語教育の可能性を、理論と実践を往還しながら追求しています。グローバル化が進む現代社会で生きていくための「ことば」の教育のあり方を追求することを研究の大きな目的としています。



大森弦史・西洋美術史（19世紀フランス美術史）を専門としています。特にドーミエに代表されるフランスの諷刺画を中心として、版画史・諷刺画史について包括的に研究しています。また美術史的観点から、現代のメディア芸術への影響についても考察を試みています。



「大学生活を送る上での困難」に対する留学生 A の意識構造

4-1. A の「大学生活を送る上での困難」に対するイメージ

● クラスタ① «日本語能力が必要»

あの、今はだいたい分かるんですけど、昔、1年、2年生のとき、……うーん、今、一番簡単な「フォーカス」とか、「しぼり」とか、あのー「シャッタースピード」、「ワイドバランス」？と、「焦点」とか、そうみたいな言葉、が、多かった。〈略〉先生が、なんか書いて、でも、あの言葉が辞書も出てこないし、〈略〉で、ネットで調べる、ネットもない、いろんな意味もあって、どっちかなー、で、調べて、で、意味分かったらまた戻ると、〈略〉もう違う（ことを話している）

● クラスタ② «人間関係の葛藤»

● クラスタ③ «昔から感じている日本語の問題»

● 全体について

特にクラスタ①と②には「自信」が関係していると言い、インタビューを通して、A は幾度か「自信が無い、自信があったら下手でもみんな話す」と、留学生が海外生活の中で自信を持ちにくいことを強調していた。

留学生 A に関する PAC 分析 (発表ポスターより抜粋、一部改変)